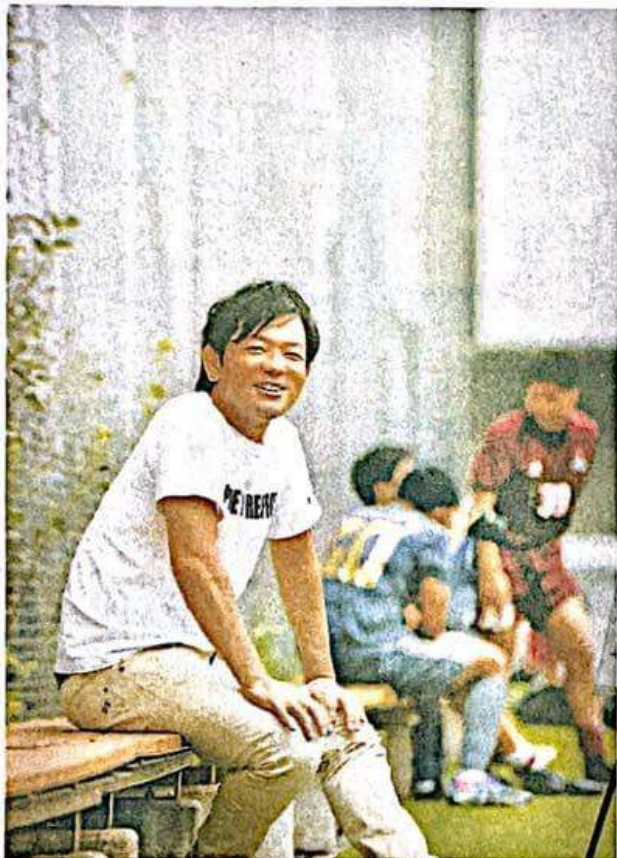


興国高校サッカー部監督 内野 智章 さん(43)



① カリスマ指導者の心得

叱ったら成功まで責任を持つ



興国高校のグラウンドで取材に応じる内野智章さん。部員たちとのコミュニケーションを大切にしている
＝大阪市天王寺区(南雲都撮影)

興国高校サッカー部監督の内野智章さん(43)は、毎年のようにプロ選手を輩出する高校サッカー界のカリスマ指導者として知られている。目の前の勝利よりも将来の大成を考えた独自の理論と手法を確立し、ワールドカップ(W杯)日本代表入りが期待されるセルティック(スコットランド)の古橋亨梧選手も教え子の1人だ。だが、プロになれるのは、ほんのひと握り。「いくつになっても、部員たちにはサッカーを楽しんでほしい」と話す内野さんに、約300人の大所帯を束ねる心構えを聞いた。

「こんなん送ってくるんですよ。送っていると違いますか？」インタビュ取材の際に内野さんが見せてくれたスマートフォンには、1人の部員がおどけた様子で土下座する写真があった。部員と監督、コーチらで共有しているLINE(ライン)グループの画像。「●●容疑者、ユニホームを忘れて体操服を持ってくる。内野裁判官によって釈放される」(●●には部員の実名)との文章が添えられていた。

校外の堺市立サッカー・ナショナルトレーニングセンターで行われた練習でのこと。全員がユニホームを着て臨む予定だったが、ある部員が間違えて体操服を持ってきたのだ。「なにしてんだよ」と叱ったことに對するユーモアあふれる反応が、その写真だった。

ただ、試合中に中途半端なプレーをしたり、チャレンジしなかったことに對しては、厳しい口調で叱責する。「いやもうポロカスです。教える時間が足りない分、ピッチでそうやって厳しく要求しないと、次のステップで活躍できない。ただ、ピッチ外では僕が一番ふざけています。一番アホなことを言ってます。アホなことをして。オレたちひょうきん族と映画のアウトレイジのビートたけしさんの連みみたいな…。ピッチでの厳しきで潰れないような環境をつくっているんです」と内野さん。

その上で重要視しているのは、怒った部員ほど次の試合で使うこと。なぜ怒ったのかを明確にすることだ。「叱るようになっていったら、めっちゃめっちゃ怒った部員は」

絶対に、次の試合は先発させます。怒って外しちゃつと、萎縮しちゃつので。できるようなるまで怒られるし、試合に出されるし、自分がしないとチームも負けるし…。違ふ意味で、もうやるしかないみたいな環境をつくっています」と理由を説明した内野さんは「うも強調する」。

「部員たちが腑に落ちないままでは終わらせないようにしています。何で怒られているのか分からへんというのが、一番ストレスでありフラストレーションなので。例えばパーンと突き放しても、腑に落ちてなかったらあかんなと思って、その日の夜に「俺はこういう理由で、お前にポロカスに言った」みたいなラインを送る。怒った部員に對しては、ちゃんと納得するまでは、やりきります」

やりきることで、部員たちも、腐らずに努力を続けられる。「やっぱり、成功体験なしにモチベーションは出ない。やったらできたわってという体験がないままだと、落ちていく一方になるの」とフォロワーの大切さを話した内野さんは、指導者の覚悟をこう口にした。「成功するところまで責任取られへんのやったら、怒るなって思ってます」

〈聞き手〉

編集委員 北川信行

うちの・ともあき 昭和54年、大阪府堺市出身。和歌山・初芝橋本高から高知大学を経て当時、日本フットボールリーグに所属していた愛媛FCに加入。退団後、大阪に戻り、関西社会人リーグの奈良・高田FCでプレー。平成17年に興国高の非常勤講師となり、翌年から体育教員、サッカー部監督に就任した。同校はこの10年間で約30人のJリーガーを輩出している。

